いつか、大切なところ

魚住　直子　文
こまおり　純　絵

(一)

タタン、タタン、タタン。
タタン、タタン、タタン。
電車は軽やかなリズムでゆれている。あと十分でとうちゃくだ。
もうすぐ友達に会えると思うと、亮太はわくわくした。
四年生が終わった春休みに、亮太は父さんの転勤で引っこした。
電車で二時間はなれた町だった。
引っこすことになったと初めて聞いた夜を、今でも覚えている。
知らない所に住み、知らない学校に行くなんて、考えただけでどきどきした。三年、四年と同じクラスになった一平や駿と、とても気が合っている。仲のよい友達と別れるのはぜったいにいやだ。ショックでねむれず、常夜灯のとよりない光を見つめ続けた。
終業式の日は雲一つなく、よく晴れていた。青空の下、亮太はなみだがあふれた。一平と駿もしきりに目をこすった。
それからひと月がたち、四月の終わりの休日に、一平と駿に会いに行くことにしたのだ。待ち合わせは前の小学校の校庭だ。
一人で電車に乗り、前の町に行く。いや、「行く」じゃなくて、「帰る」だ。亮太にとっての自分の町は、今でも前の小学校がある町だ。そして、それはこれからも永遠に変わらないと決めている。
自分の学校に帰れるんだ。そう思うだけでむねがはずんだ。
まどの外がまぶしい。亮太は景色をながめながら、電車のリズムに体をゆらしていた。

(二)

校庭に入った亮太は、びっくりして思わず立ち止まった。
だれもいない校庭に、一平と駿だけが待っていると思っていたのに、たくさん人がいる。ジャングルジムに上ったり、走り回ったり、縄とびをしたり。低学年の子が多いが、まるで休み時間のようだ。
ずっと前に、校庭を開放している休日に来た時は、がらんとしていた。今日は天気がいいからだろうか。
鉄棒の近くに駿がいる。だれかといっしょだ。でも一平じゃない。
あれはたしか、四年の時、となりのクラスだった森田君だ。
「駿。」
亮太がよぶと、すぐに気がついた。
「おおっ。」
駿が笑顔で走ってくる。
それと同時に、後ろから「亮太。」と声がした。ふり向くと一平だ。校門から走ってくる。
一平と駿が前と後ろからやってくる。二人にはさまれ、亮太はうれしくてむねがいっぱいになった。
「元気だった？学校はどう？」
「もう慣れた？友達はできた？」
二人が次々にたずねる。
「ちょっとは慣れたかな。クラスは一つ多くて、四クラスあるんだ。友達も、まあまあできたよ。」
「よかったね。」
駿がほっとしたように笑った。一平もうなずく。
「それで一平と駿はどう？クラスは別になったんだよね。」
「そうなんだ。一組と三組に別れたんだよ。」
一平が答えた。
いつのまにか、森田君もそばに来て、話を聞いている。
亮太は、森田君をちらっと見た。なんだかむねにすき間風が入ってきたような変な感じだ。
四人でかくれおにをすることになった。亮太はにげる側になり、走りだす。
水飲み場の青いタイル。ペンキが少しはげたサッカーゴール。大きなタブの木。変わっていないものを見るたびに、亮太はほっとした。
そのあと、一平の家に行った。森田君もまたいっしょだ。
一平の家では、おもちゃのラケットとテーブルを使って、たっきゅうをして遊んだ。亮太はたっきゅうが大好きだから、前と同じようにはりきった。
お昼ご飯をごちそうになっている時、
「あ、そういえば。」
一平が思い出したように言った。
「あの白い子が、学校のうらの家にすんでるって知ってる？」
「急に消えた子？」
駿がきいた。
なんの話だろう。亮太は、一平と駿の顔を見た。
「ちょっと前に生まれたんだって。その中の一ぴきらしいよ。」
「ほかのも白いのかな。」
「ブチもいるんだって。」
亮太がわからない顔をしていることに気がついたのは、森田君だった。
「ねこの話だよ。」
先週、学校の中庭に、とつぜん子ねこが一ぴき現れた。首輪をしていない真っ白な子ねこで、休み時間になるたび、みんな見に行った。家に連れて帰りたいという子も出てきたけど、四時間めが終わって見に行くと、消えていたという。
「だれだよ、ゆうれいねこだって言ったのは。」
一平の言葉に、駿と森田君が笑った。亮太もいっしょに笑いながら、むねの中で冷たい風がふいている気がした。

(三)

帰る時間になった。一平と駿と森田君がげんかんで見送ってくれた。これから一平はスイミングに、駿は森田君の家に遊びに行くらしい。

「じゃあねえ。」

一平と駿が、笑いながら大きく手をふる。亮太も手をふり返したが、笑顔を作れなかった。

終業式の日も同じように見送られた。あの時は二人とも泣いていたけど、今はもう笑っている。

もう亮太が転校してしまったからだろうか。会おうと思えば、会えるからだろうか。

でも、亮太はあした、この学校には来られない。あしただけじゃない、あさっても、その次の日も、ずっとだ。

(四)

帰りの電車は、ぬれた服を着たように体が重かった。

タタン、タタン、タタン。電車の音も単調で、ちっともはずんでなどいない。しかも混んでいて、すわれなかった。

亮太はつりかわにつかまり、ぼんやりと外をながめた。

前の友達と学校は、何も変わらないと思っていた。前の町に行けば、引っこす前と変わらない状態にもどれると、勝手に思いこんでいた。

だけど、そんなはずがない向こうは向こうで、新しいことがどんどん起きているのだ。

……ひとりぼっちになったみたいだ。

なみだがこみあげてきそうなのをこらえ、まどに目をやると、くすんだ色の景色が流れている。

(五)

改札を出て、のろのろ歩き始めると、一台の自転車が亮太を追いこしていった。

と思うと、すぐ先で止まり、自転車に乗った女の子がこっちを見た。

「西村君だよね。」

亮太はびっくりして立ち止まった。

「……えっと、同じクラス？」

「ちがうよ。」

女の子は笑った。

「クラブがいっしょ。」

「あ、そうか。」

亮太は、新しい学校でたっきゅうクラブに入った。でも、活動はまだ一度だけだ。顔も全員は覚えていない。

「あと、家が近いの。西村君ちって郵便局の近くでしょ。うちもあの通り。」

全然知らなかった。

「さっきまで、児童センターでたっきゅうしてたんだよ。」

「たっきゅう台があるんだ。」

「三つ。みんな、けっこう来てるよ。今度西村君も来たら。」

行きたい！亮太はうれしくなった。今度行くよと言おうか。ありがとうと言ったほうがいいか。

女の子は亮太が返事をする前に、「じゃあね。」と、自転車をこぎだした。

水色のパーカが風にひるがえり、どんどん小さくなっていく。

「亮太。」

ふり返ると、母さんだ。

「やっぱり、さっきの電車だったのね。お帰り。」

買い物をしてきたらしく、ふくろを両手にさげている。

「今、だれとしゃべってたの？」

「名前は知らない。」

母さんがびっくりした顔になる。

「えっ、知らない子としゃべってたの？」

「そうじゃなくて、同じ学校の人だよ。名前は知らないけど、そのうちわかる。」

言ってから、そのとおりだと思った。

今、知らなくても、そのうちにわかる。ここで知っていることがどんどんふえていくのだ。

ふと、今度の学校の教室が目にうかんだ。転校した初日、にげ出したいくらいどきどきした教室だ。

でも、いつのまにかそんな気持ちはなくなっている。わからないことは、みんなすぐに教えてくれるし、休み時間に遊ぶときもさそってくれる。放課後、同じクラスの子の家に遊びにもいった。それに転校生がめずらしくない学校だからか、あまり注目されずにすむのもありがたい。

あれっと、亮太は思った。そうか、今度の学校も悪くない。まだちょっときんちょうしているけど、そのうちに慣れるだろう。

「一つ、持つよ。」

母さんのふくろを取り、先に歩きだした。

前の学校も、前の町も、大好きだ。

でも、いつか新しい学校を自分の学校だと思う日が来るかもしれない。いつかこの町を自分の町だと、迷わず言う日が来るかもしれない。

顔を上げると、まだ明るい大きな空が広がっている。その中を、一筋の飛行機雲が、まっすぐにのびていた。